

## 「新収貴重書展」の開催にあたって

明治大学図書館では、「明治大学図書館収書基本方針」に基づいて、教育・研究に必要な資料を購入しています。その中には貴重書や大型コレクションなどの特別な資料も含まれ、長年収集され、既に特色あるコレクションを形成している分野には予算を重点的に配分し、さらなるコレクションの充実・発展に努めています。たとえば、古地図の一大コレクションである「蘆田文庫」、近代日本文学の初版本を集めた「日本近代文学文庫」、近世文学の洒落本、読本、草双紙類を集めた「江戸文藝文庫」などをあげることができます。これらの資料は「新収貴重書展」として、中央図書館ギャラリーで定期的に公開しています。

今回は2011年度に収蔵した資料を中心として展示します。スペースの関係で全ての資料を展示することはできませんが、注目される資料としては、『広開土王碑拓本』、『1851年第1回ロンドン万国博覧会・図版コレクション』などがあります。

また、「江戸文藝文庫」から『笛竹すみだ川』、『夢合返魂香』、黄表紙『新田義貞一代記』などや、近代文学の初版本として樋口一葉『たけくらべ』、井伏鱒二『随筆』、武者小路実篤『お目出たき人』など、現在でも読み継がれる名著の数々を展示しています。

中央にある展示ケースには「蘆田文庫」から小説『天地明察』の主人公で、江戸初期の天文学者保井（渋川）春海の作成した『天文分野之圖』、江戸後期の浮世絵師鋏形蕙斎『江戸名所の繪』などを展示しました。

紙の本が持つ、質の高い文化の薫りの一端をお楽しみいただければ幸いです。

明治大学図書館

## 江戸文藝文庫

1999年、本学文学部教授、故・水野稔氏旧蔵書の一括購入を契機に創設された。江戸後期の読本・合巻・人情本・洒落本・黄表紙・滑稽本などからなり、山東京伝の『優曇華物語』初版本(文化元年)などがよく知られている。以後この旧蔵書を核として、近世後期の小説類とその関連資料を収集範囲と定め、図書館で毎年予算を計上し、コレクションの拡充を図っている。

拡充の一つの柱が、元埼玉大学教授、故大久保忠国氏旧蔵「抱谷文庫」の購入である。江戸時代の文藝および演劇関係の原本を多数蒐集していることで著名である。本学図書館では、役者評判記・番付・せりふ本などの演劇関係の資料、式亭三馬・山東京伝・山東京山・曲亭馬琴などの諸作その他を一括した草双紙類、狂言絵本類などジャンル毎にまとめて購入を続けている。

### 1 笛竹すみだ川 5巻合1冊 作者・画工未詳 板元不明 刊年不明 913.57/75//H

青本。原刊本は、鶴屋から宝暦6年(1756)に刊行された黒本で、それを青本体裁にした再刊本である。角書が付いた元の書名は、「新版／東岸柳南枝梅／箆管隅田川」だったようである。本作は収蔵館が7件ほどしかない稀観本である。また、第二～五巻の元題簽が残っているのも貴重である。

本作が配架される「江戸文藝文庫」は、元来が後期戯作を中心とし、黒本・青本のような初期草双紙類は手薄な領域だった。その欠を補う意味でも、本作の持つ意義は大きい。

なお、本作には、画像資料として東北大学図書館狩野文庫本のマイクロフィルム資料が備わり、オンデマンド出版で発売されている。

### 2 夢合返魂香 3巻合1冊 葛葉山人(1768～1819)作／ 歌川国直(1793～1854)画 鶴屋金助板 文政2年刊(1819) 913.57/SH6-2//H

合巻。作者の葛葉山人は、姓は野々山、通称は正二。別号は榿々堂・鳳凰軒・万寿亭など。旗本の出で放蕩の末、初代並木五瓶の弟子となって初代篠田金治を名乗り、文政元年に二代並木五瓶を襲名したが、翌年七月七日に没した。享年五二。脚本として知られた作はないが、清元「保名」の作詞者として現在に名を残している。葛葉山人名は戯作上の号で、この戯号で15作ほどの合巻を書いている。本作は刷付け表紙だが、絵題簽を張り込んだような意匠になっているのが面白い。

画工の歌川国直は、初代歌川豊国の門人で、文化から天保年間(1804～1844)にかけて活動した。挿絵画家としては合巻・人情本など200作以上に筆を揮っているが、特に、人情本で人気を博した。

### 3 花盛雛献立 3巻 古今亭三鳥(生没未詳)作／ 歌川美丸(生没未詳)画 森屋治兵衛板 文化13年刊 913.57/K02-1//H

合巻。角書「熊坂長兵衛女金賣」。作者の古今亭三鳥は、江戸浅草の薬種仲買商で、通称は三河屋吉兵衛。式亭三馬に学び、文化3年(1806)頃から戯作に筆を執り、文政年間まで合巻・咄本など20作ほどをものしている。趣味的戯作者というべきであろう。

画工の歌川美丸は、100作近くの合巻に筆を執っているが、さほど見るべき作はない。文政9年頃(1826)までは、その名が見えるので、その頃に没したものと思われる。

4 <sup>にったよしきだいちだい</sup>新田義貞一代記 5巻 南杣笑楚満人(1749~1807)作／

舎辰齋三蝶(生没不明)画 伊勢次板 913.57/NA1-8//H

黄表紙。「敵討物」で人気を博した一世南杣笑楚満人の作で、『国書総目録』未載の稀観本である。題簽が五巻分そろっている点も価値が高い。楚満人は本名楠彦太郎、江戸芝宇田川町在住と言われるが、家業は医者・板木師・鞆師など定説はない。楚満人には、頼朝・頼政などの名を冠した「……一代記」の作が15作ほどあるが、本作もその一類と見られる。ジャンルのには黄表紙とは言うものの、古風な黒本・青本風の武家一代記である。なお、本学図書館では内題書名の「新田義貞一代記」で登録してあるが、他作と関連から見ても、通称は題簽の「義貞一代記」でよいだろう。

画工の「舎辰齋三蝶」は「泉花亭三蝶」かと思われるが、経歴が定かでない。本作は「三蝶」の作としても新出であり、その意味でも資料的価値が高い。

5 <sup>しろきまのちおとこゆきのぶ</sup>素後壮雪信 2巻 芝全交(1750~1793)作 鶴屋喜右衛門板

寛政10年刊(1798) 913.57/SH7-1//H

黄表紙。作者の芝全交は、本名山本藤十郎。江戸の富商吉川氏の子に生まれ、水戸藩の狂言師山本藤七の養子となった。芝西久保神谷町に住んだことから、戯作名に芝を名乗った。黄表紙全盛時代を代表する作者で、名作『<sup>だいひのせんろっぼん</sup>大悲千祿本』をはじめ、50作ほどをものしている。

本作は、全交没後の刊行で、題簽や最終丁の署名に「遺作」と銘打たれている。所蔵館は五件ほどしかない稀観本で、題簽がそろっている点も極めて貴重である。なお、本作の複製資料としては、林美一個人雑誌『未刊江戸文学』別冊の『未刊黄表紙選一』がある。



**6 「1851年第1回ロンドン万国博覧会・図版コレクション」 ロンドン 1854年**  
フォリオ判 全2巻 1854 092.3/723//H

*Dickinsons' Comprehensive pictures of the Great Exhibition of 1851 : from the originals painted for H.R.H. Prince Albert / by Messrs. Nash, Haghe, and Robert* London : Dickinson, 1854

1851年にロンドンで開催された、第1回万国博覧会は、ヴィクトリア時代のイギリスにおける一大イベントだった。期間は5ヶ月、入場者数は600万人を超えたという。出展の半数は当時世界の四分の一を支配していた大英帝国とその植民地の製品や産物で、残りの半数は世界中の国々が国威発揚のために出品した。会場はハイドパークで、そこに立てられた総ガラス張りの建物は、風刺雑誌「パンチ」によって「クリスタル・パレス（水晶宮）」と命名された。本書は、3人の著名画家による彩色図版55枚の稀少なコレクション。中でも30メートルの吹き抜けを描いた絵は特に有名。また詳細に描かれた各パビリオンの様子は、大英帝国のみでなく、他のヨーロッパ諸国やアジア諸国の当時の社会や産業等を知るための貴重な歴史的資料である。

**7 スピノザ 『デカルト哲学原理』（1663）『神学政治論』（1670）『遺稿集：エチカ』（1677）**  
アムステルダム 初版3作品合本 1冊 091.3/993//H

Spinoza, Benedictus de, 1632-1677

*Renati Des Cartes Principiorum philosophiæ / per Benedictum de Spinoza* Amstelodami : Apud Johannem Riewerts, 1663 Bound with *Tractatus theologico-politicus...* 1670

*Opera posthuma : quorum series post praefationem exhibetur*, 1677

スピノザは、オランダの哲学者・神学者。デカルトやライプニッツと並ぶ合理主義哲学者として知られ、ドイツ観念論やフランス現代思想へ強大な影響を与えた。本書は、スピノザの代表的著作3点の初版が合冊されたもの。『神学政治論』は匿名で出版され評判となったが、1674年には禁書となった。このような政治情勢の中で、スピノザは1675年には主著『エチカ』（倫理学）を完成させたが、出版を断念せざるを得なかった。『エチカ』はスピノザの没後、友人らによって刊行された遺稿集の中で初めて公開された。

**8 ブルトン・ド・マルティニエール『日本』パリ 1818年 4巻 合本2冊 092.3/9//S**  
Breton de La Martinière, Jean Baptiste Joseph

*Le Japon, ou, Mœurs, usages et costumes des habitans de cet empire : d'après les relations récentes de Krusenstern, Langsdorf, Titzing, etc ... suivi de la relation du voyage et de la captivité du capitaine russe Golownin / par M. Breton* Paris : A. Nepveu, 1818

クルゼンシュテルン、ラングスドルフ、ティチングらとの近年の交流、および、それ以前の旅行者が明らかにした資料をもとにした、「この帝国（日本）の民の風俗、慣習、衣装。付録：ロシア人船長ゴロヴニンの航海と捕囚の記録」という長い副題にあるように、本書は、当時の旅行記、航海記などを元に、新しい情報を加えて書いた日本紹介の書。サハリンやアイヌなど北方民族のものを含む日本を題材とした手彩色版画による51枚の挿絵が興味深い。

## 和貴重書

### 9 『広開土王碑拓本』 [製作者、製作年不明] 092.6/40/H

広開土王碑は414年に高句麗第19代の王広開土王の死後、王の功績を後世に示すために建てられた。広開土王は南北に進出して朝鮮半島を領有。百済と結んで南部に進出した日本軍と戦い、撃退した。

歴史の教科書に必ず掲載される碑文であり、4世紀末から5世紀初頭にかけての日朝関係を知る貴重な資料。高さ6.3メートル、幅1.3~1.9メートル。碑文の字数は総計1802字(1775字説もある)で、文字の大きさは平均12センチメートル平方。

1880年に発見され、日本陸軍の砲兵大尉酒匂景信がその拓本を入手し、参謀本部で解読した。1980年代に入ると、原碑の研究が中国で再開され、84年7月以降、日本人研究者による原碑の見学・研究も始まった。

### 日本近代文学文庫

小林秀穂元予科長の寄贈書(文学、哲学書100冊)をもとに、昭和22年(1947)に「小林文庫」として設置。日本文学の授業で薫り高い文学書初版本を学生に触れさせたいとの考えからであったと伝えられる。1991年に故佐藤正彰元図書館長・文学部教授の旧蔵書を受け入れるにあたって現名に改称した。

コレクションは明治から昭和戦前期までの文学書の初版本を中心とし、最近では文学史上重要な作家の戦後の作品を加えている。また、本学関係者の作品およびその人となりを伝える自筆もの(署名本、草稿、書幅等)もコレクションとしている。

### 10 無盡藏書齋主人(1837-1898)『通俗伊蘇普物語』

明治6(1873)年序 尚古軒浦吉 全6冊 河鍋暁斎画

MB100/WA8-1//W

イソップ寓話集の英訳本—トマス・ジェームズ(Thomas James)“ÆSOP'S FABLES”およびフィラー・タウンゼント(Fyler Townsend)“Three Hundred Aesop's Fables”—を無盡藏書齋主人こと幕末・明治期の洋学者、渡部温が翻訳したもの。全237話。江戸後期の咄本と呼ばれる笑話集にならない、平易な文語体の地の文に軽妙な口語体の会話文を織り込んだ文体が特徴である。この刊行は広く好評を博し、明治時代には「嘉言善行等ヲ口授」するための本として、当時開始されたばかりの小学校教育における修身の授業にも採用された。

### 11 松原岩五郎(1866-1935)『最暗黒之東京』

明治26(1893)年11月 民友社 MB100/MA30-1//W

表紙の著者表示は 乾坤一布衣。1892年11月、徳富蘇峰主筆の『国民新聞』に入社し、東京の下層社会のルポルターージュを書いた。「芝浦の朝烟(最暗黒の東京)」という連載は、何度か中断を挟みつつ、ほぼ十ヵ月にわたって掲載された。いわば、スラム潜入記である。好評を博し、その粋を抜き、加筆したものがこの冊子である。本書は初版。

### 12 蒲原有明(1875-1952)『春鳥集』

明治38(1905)年7月 本郷書院 MB100/KA12-1/B/W

かんばらありあけ  
蒲原有明は、複雑な言葉づかいやリズムをあやつる象徴派の詩人。

『独絃哀歌』『春鳥集』『有明集』などを発表し、のちの北原白秋や三木露風らに影響を与えた。本書は、象徴詩人として蒲原の評価を確立した名著とされる。

蒲原は、洋画家の青木繁（明治 15・1882～明治 44・1911）と親交を結んだことから、青木の代表作「海の幸」（1904 年制作）を本書の挿絵にもちいた。その作品を「すなどり人らが<sup>びと</sup>勁き<sup>つよ</sup>肩たゆまず、<sup>むなじし</sup>胸肉張<sup>り</sup>て<sup>た</sup>足らへる<sup>こゑ</sup>聲ぞ、ほこり、よろこびなるや」とたたえ、のちに 28 歳で夭逝する青木の画業に深い関心を寄せている。

### 13 武者小路実篤（1885-1976）『お目出たき人』

明治 44(1911)年 2 月 洛陽堂

MB100/MU9-12//W

武者小路実篤は小説家、劇作家、詩人、画家。トルストイに傾倒し、志賀直哉らと雑誌『白樺』を創刊。宮崎県で「新しき村」のユートピア運動を实践、『幸福者』『友情』『人間万歳』等を著す。1951 年文化勲章受賞。作中に何度も登場する「自分は女に飢えている」という一文が、独身男性の煩悶をありのままに映し出す。恋愛と妄想の狭間で怪しく蠢く主人公の姿は、滑稽でありながら、どこか物悲しい。

初版出版の折、作者自身で、『白樺』誌上に「作者自身もある個処をぬかして今迄自分の書いたものの中で一番得意のものである」「誰も買って後悔するやうな代物ではない」と広告文を出している。

### 14 樋口一葉（1872-1896）『たけくらべ』真筆版

大正 7(1918)年 11 月 樋口邦子編 博文館 函入り、口絵：鍋木清方

MB100/H13-5//W

一葉（本名夏子）は明治 5 年、東京の下級官吏の家に生まれた。21 年に兄を失いその翌年に父を亡くした一葉は、17 歳で戸主となり母と妹の暮らしを支えなければならなかった。文学の素養のあった一葉は小説を書いて収入を得ようと半井桃水に師事して小説の書き方を学ぶ。その後、結核により 24 歳で短い生涯を終えるまでの間に『おおつごもり』『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』など、日本近代文学史に残る名作を書いた。『たけくらべ』は、遊女となる運命の勝気な少女美登利と、僧侶の子である内向的な少年信如の淡い初恋を描いた短編。遊郭・吉原に近い下谷龍泉寺町で雑貨屋を開いていた経験からこの小説の題材を得たと考えられている。明治 28 年 1 月～29 年 1 月まで「文学界」に連載され、29 年 4 月に改稿されて「文章倶楽部」に一括掲載された。本書は、この稿本が大正 7 年 11 月に印影本（博文館蔵版）として出版されたものである。

**15 井伏鱒二 (1898-1993) 『随筆』 昭和 8(1933)年 5月 椎の木社  
MB100/IB3-18//W**

井伏鱒二は小説家・随筆家。「鱒二」は、釣り好きだったことにちなんだ筆名。本書は、初版特製 200 部のうちの一冊で、署名入り。表紙の紗綾型模様が目を引く。序文は三好達治。「風貌・姿勢」の章で、堀辰雄、小林秀雄、今日出海、永井龍男、三好達治、河上徹太郎、深田久彌など文壇の名士のキャラクターに言及して興味深い。出版の 5 年後に、『ジョン万次郎漂流記』で第 6 回直木賞を受賞。昭和 41 (1966) 年、文化勲章受章。井伏が唐代の詩を和訳した「ハナニアラシノタトヘモアルゾ 『サヨナラ』 ダケガ人生ダ」というフレーズは、とくに有名である。

**16 辻潤 (1884-1944) 『癡人の獨語』 昭和 10 (1935) 年 8月  
書物展望社 特装限定 100 部 背・角皮装 平コルク装  
天金 函付 MB100/TS8-2//W**

著者は大正・昭和前期の評論家。国民英語会、自由英学舎などで学び、上野女学校の英語教師となるが、明治 45 (1912) 年教え子との恋愛で退職。のちダダイズムと無政府主義の思想に接近する。昭和 7 (1932) 年ごろから精神が錯乱し、放浪・入院生活を送った。

本書は、特装限定 100 部のうちの第 16 冊。背文字と挿絵も著者による。著者の署名・落款入り。

**17 志賀直哉 (1883-1971) 『廿代一面』 昭和 22 (1947) 年 1月  
多摩書房 装幀：三浦直介 MB100/SH6-20//W**

著者は、大正から昭和にかけての代表的な小説家。明治 16 (1883) 年生まれ。明治 43 (1910) 年、武者小路実篤らと雑誌「白樺」を創刊。その後、『城の崎にて』『和解』『暗夜行路』などの作品を書く。本書は、著者の後期の作品『廿代一面』を含む全 10 編を収録した短編小説集。

冒頭部分に、著者による訂正の書き込みがされている。また本書には、著者の弟子の一人である網野菊子(網野菊)宛のペン署名がある。

**18 井上靖 (1907-1991) 『闘牛』 昭和 25 (1950) 年 3月  
文藝春秋新社 猪熊弦一郎装幀 ペン書名入り MB100/IN6-1//W**

『文學界』昭和 24 年 12 月号に発表された短編小説。第 22 回芥川賞受賞作品。新大阪新聞社主催により西宮球場で実際に催された南予闘牛大会をモデルとしている。終戦直後の混沌とした空気の中、闘牛大会の実現に注力する新聞記者の情熱、その行動の裏に見え隠れする孤独な心情を描く。あとがきには「本書校正中、『闘牛』による芥川賞受賞の報に接し、その僥倖に驚くと共に、果して今後大方の期待に添ひ得るか否かを懼れるもので

もあるが、常に文学の高い峯の稜線に目をおき、真直ぐに歩いていく態度だけは決して失ふまいと自分にいひきかせてゐる」とある。文壇デビューのきっかけとなった本作中で「社運を賭した」大事業に奔走する主人公の思いと、新聞記者から転身し「作家に賭ける」筆者自身の決意とを重ねているようでもある。

## 19 澁澤龍彦(1928-1987)『狂王』 昭和 41 (1966) 年夏

プレス・ビブリオマーヌ 挿絵：野中ユリ MB100/SH30-1//W

澁澤龍彦は小説家、評論家、フランス文学者。1959年、マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』を翻訳出版し、1961年猥褻文書販売・所持罪となる(通称サド裁判)。本書は限定275部発行されたものであり、澁澤龍彦の豪華本としては希少価値の高いものである。全ページに一枚漉和紙を全面的に用い、刊行当時の日本での造本の技術・材質としては、最高の水準に達している。「狂王」の異名で知られる第4代バイエルン国王、ルートヴィヒ2世の生涯への考察もさることながら、その著述内容への挿絵も秀逸である。

## 20 中上健次(1946-1992)『地の果て至上の時』

昭和 58 (1983) 年 4 月 新潮社 装画：高山辰雄 MB100/NA41-1//W

著者は、1976年、『岬』で第74回芥川賞を受賞する。戦後生まれで初めての芥川賞受賞者である。本書は、『岬』『枯木灘』に続き、著者の出身地熊野を舞台にした3部作の完結編といわれる。

見返しに著者による冒頭部「朝の光が濃い影をつくっていた。」との毛筆の書き込みと署名落款がある。

## 21 『叢書水の梔子・火の雉子』

昭和 48 (1973)-昭和 53 (1978) 年 湯川書房 MB200/58//W

前衛短歌運動を主導し、戦後歌壇を代表する歌人塚本邦雄による解説と、各著者の署名が全巻に付された詩歌の叢書で、「火の雉子」には短歌4点(白き西風の花/原田禹雄著、夢の法則/春日井建著、蜻蛉記/山中智恵子著、槿花譜/安永蒔子著)、「水の梔子」は俳句6点(わが金枝篇/寺山修司著、舊句帖/高橋睦郎著、早春展墓/金子兜太著、薔薇色地獄/馬場駿吉著、山川蟬夫句抄/高柳重信著、國境/鈴木六林男著)が収められている。いずれも未刊の書目があり、これら叢書が完結していれば稀に見る豪華なアンソロジーとなった筈である。政田岑生の編集で湯川書房より1973年から刊行され、当館所蔵は限定300部のうちのNo.4で、同じ番号揃いである。

## 蘆田文庫

歴史地理学者として高名な蘆田伊人あしだこれとが生涯をかけて収集した約 2000 点の古地図のコレクションを 1957 年に購入。内容は、世界図、北方図、日本図、地方図、町図、街道図、水路図、俯瞰図など幅広い分野に渡っている。日本図では、江戸初期の行基図や国絵図、元禄期の石川流宣『本朝図鑑綱目』、江戸中期に民間図の主流をなした安永 8 年(1779)版の長久保赤水『日本輿地路程全図』、伊能図、明治期の地形図などが系統的に集められており、日本地図成立史を知る上でも有用なコレクションと言える。また、地方図には、当該地域において既に失われてしまった貴重なものが含まれている。世界図では、大黒屋光太夫将来の両半球図写図や、リッチ系の楕円形図などが所蔵されている。

### 22 保井春海 『天文分野之圖』 延寶 5 (1677) 年

1 軸 105.8×55.0cm AS100/9//H

14 世紀李氏朝鮮で作られた『天象列次分野之図』をもとに作製された円形星図。「分野」とは、中国の星占いで天の二十八宿を地上の国々に対応させることで(分野説)、本図は日本にそれを当てはめ、星図の外周に日本の地名が記入されている。作者保井春海はるみ(1639～1715)は、2010 年本屋大賞を受賞した沖方丁著『天地明察』の主人公渋川春海。江戸幕府碁方家元安井家に生まれ、二代目安井算哲を名乗る。かたわら天文暦学を学び、日本人による初めての暦「貞享暦」を完成させた。また本図作製の後、観測に基づく星図『天文成象』を子息保井昔尹ひきただの名で刊行している。

### 23 鋏形紹真 『江戸名所の繪』 木版 1 枚 42.6×57.3cm

AS36/319//H

作者鋏形紹真しょうしんけいさい蕙齋(1764～1824)は、初め北尾政美まさよしの名で浮世絵師として活躍した。その後津山藩(岡山県)お抱え絵師、狩野派の門人となり鋏形蕙齋を名乗る。本作品は、図下辺中央に「カメイド」の地名があるので、このあたりの上空から富士山の方角を見下ろす鳥瞰図。非常に細密に江戸の町を描写する。図上に標題は記されておらず、「江戸一覧図」「江戸俯瞰図」等と呼ばれることがあるが、本資料には希少な刊行当時の袋がともに残されており、その題簽から標記の題名を知ることができる。文化年間頃の刊行と推定されている。この時期、鋏形蕙齋の『日本名所の繪』(参考展示)、葛飾北齋の『東海道名所一覧』など同様の手法を用いた鳥瞰図が多く刊行された。

【参考展示】日本名所の繪/鋏形蕙齋紹真筆 AS09/197//H

【参考展示】天地明察/沖方丁著(角川文庫)